

## イタリア外遊中の阿部次郎あて書簡

曾根原 理

### はじめに

阿部次郎(1883-1959)といえば、戦前の日本を代表する文化人の一人で、人格主義を唱えて大正期の社会思想に大きな影響を与えたといわれる。また、著書『三太郎の日記』が旧制高校生の必読書と称されたことなどでも知られている。一方で、40歳前後に仙台に拠点を移し、外遊を経て日本文化研究にも重点を置くようになり、東北帝国大学の文科系学部の中心として活動したことは、あまり知られていないようだ。阿部はいわば、東京に拠点を置き西洋学に親しんだ前半生の活動のみで名声高く、仙台に移って日本文化研究に手を染めた後半生については注目されること少ない人物であったといえる。しかし、彼の思想や主張を把握するためには、前半生と後半生の連続・非連続を十分意識し、その全体像を把握する必要があることは言うまでもないだろう。

後半生の活動、すなわち東北帝国大学の教授としての研究や教育を検討する際に重要な材料となり得るのが、彼の残した書簡や日記である。それらの多くは『阿部次郎全集』(以下「全集」)に収録されている。ただ書簡については、一般的に言っても完全に収集するということが難しく、阿部の場合も未収録書簡が少なからず存在すると考えるべきだろう。また、阿部宛に送られた書簡は、全集には収録されないため、従来世に出ることは乏しかったといえる<sup>1)</sup>。

次に日記については、一部欠けていることが明らかになっている。阿部の三女で全集編纂にも関わっていた大平千枝子によると、阿部次郎本人は死後に書簡や日記の焼却を命じる一方で、日記類は整然と整理され残されており、その中で欠けている年代については、偶然ではなく、阿部本人の意思が反映していることを考えるべきであるという<sup>2)</sup>。阿部自身の中には、少なくとも当面は残して管理すべき日記と、すぐに処分し残すべきでない日記の区分が存在したらしいのである。

さて、そうした中で、2020年に阿部次郎記念館(東北大学文学部附属)における未整理の書簡類4千通以上(大半は阿部次郎宛)が確認された<sup>3)</sup>。これを用いることで、全集に収録されずに知られている日記や書簡の内容が補強されるのはもちろん、日記を欠く期間についても、従来知られている以上の事実を確認できるかもしれない。場合によっては日記が残されなかった事情にさえ説明を進めることができる可能性が生まれた。本稿はそうした前提に立ち、残された日記を欠く阿部次郎の外遊時期のうち、イタリア滞在期間の調査を進めるものである<sup>4)</sup>。

阿部次郎は1922年(大正11)6月20日のマルセイユ到着から、翌年9月11日のマルセイユ出発まで欧州に滞在したが<sup>5)</sup>、そのうちフランス・イギリスに滞在した1922年7月1日から10月2日は「仏英日記」が残されている<sup>6)</sup>。またドイツ滞在中の記録は『遊欧雑記 独逸の巻』としてまとめられた(全集第7巻所収)。一方、それ以外の滞欧期間は日記を欠く<sup>7)</sup>。また、欧州滞在中の書簡(阿部次郎発信)は100通強知られており<sup>8)</sup>、加えて前述の通り同時期の阿部次郎宛書簡の一部も多少は把握されるに至っている。特に新発見の后者に注目することで、今回はイタリア滞在期の阿部の動向について、新たな事実の発掘を試みていきたい。以下の資料1～16は全て2020年以降に確認された書簡である。

## 1. イタリア滞在期の阿部次郎に対する家族からの書簡

全集所収の阿部次郎の日記によれば、阿部は1923年（大正12）1月9日朝にベルン（スイス）を発ちミラノに入り、翌日にはローマ、12日にナポリに移動。ナポリで日本人の団体（太田正雄（木下杢太郎）、金子まさ子、児島喜久雄、小林古径、原善一郎・末子夫妻、原の秘書の中根氏、前田青邨、それに阿部）を組み、14日にいったん船でエジプトに移動し各地を巡った。その後単独行動に戻り、2月3日前後にイタリア再入国。2月18日にローマ、4月3日にアッシジ、4日にペルージャ、5日にアレツォ、6日にフィレンツェ、5月10日にヴェニス、17日にミラノと移動し、20日朝にミラノを発ってルツェルン（スイス）に到着、ここまでがイタリア滞在期間となる。その前後に家族から阿部次郎に送られた書簡が6通確認される。以下、内容等について、発送された順を追って紹介する。

【資料1】大正12年（1923）1月4日 阿部恒書簡（次郎あて）<sup>9)</sup>

新年おめで度う御座います。和子が生れてから別々に年を迎えたのは今年丈だと思ひます。お正月については楽しい思ひ出が沢山御座います。私は独りで年毎の思ひ出をたどって心の中は淋しからず年を迎えました。本当に静かなお正月で御座います。今日は四日ですが、みや様が一昨日お出になったつきり年始客は只の一人も有りません。寒くは有りますが晴やかなよい日和で、子供達は羽根つきや双六に遊び暮して居ります。あなたも多分ご機嫌よく新年をおむかへの事と存じます。そして一つ位は何か思ひ出をたどって入らっしゃるだらうと想像してみます。

暮から和子と千枝子と私も風を引きましたが、只今では皆々すっかり直りました。其の度の風は高い熱が一日か二日位ですっかり下りますから直るのも早う御座います。例によって私のが一番永引きまして三ケ日は病人の様な心持でしたが、今日は普通になりましたから、御心配下さいません様に。敬坊は自由に這ひ〜を致します。何か欲しものが有りますと、どん〜行って取って参ります。寒いのでは〜かきをするのが嫌で外にさせますと、アダーと云って私に怒ります。そしてお目覚した時はどん〜逃げて行きます。その様子は何と云ひ様もなく愛らしく、私はたまらなく可愛いので抱こしてはお手々やお顔を食べます。千枝子は風引の時よく大人しく床に入って居りましたので、一日で直りました。そして好いお顔をしてよく眠って居りました。美知子は特に丈夫で毎日御雑誌を（ママ）読んで居ります。片仮名はいつの間にか大体読める様で御座います。和子も丈夫になりまして朝から晩までよく遊んで居ります。

頂いたお写真を折々拝見しては楽しんで居ります。独逸の方が生々として大きくとれましたので、プロフェッサーは殊の外小さく見えます。過日の私の写真は余りに筋骨逞ましく見えまして少し恥かしく御座いましたから、和辻さんに外国へお送りになるについて抗義を（ママ）申し込みましたが、間に合ひませんでした。唯々独逸夫人を驚かせた事と存じます。敬坊のおべ〜が（ママ）つきました。夏近くなりましたら着せませう。格別奇麗に出来で有りますので、私にはお手本になります。厚く御礼を仰って頂き度く御座います。

冬籠り春を待ち夏を待ち秋を待つ

次郎様

つね

年賀状返事は伊藤さんに書いて貰って居ります。今日迄に五六十枚で御座います。

資料1は妻(阿部恒または恒子、1881-1966)からの手紙で、中心の話題は子供たち(長女の和子、次女の美知子、三女の千枝子、次男の敬吾)の様子である。次郎は早くから妻あての手紙に「こちらへ来ての心配は子供の健康のことより外に何もない」と書き送っており<sup>10)</sup>、「少くとも月に二度ぐらいは手紙を書くことを義務と心得てあて貰ひたい」(1922年7月7日書簡)、「お前が僕のためにすることが出来るのは手紙を書くことだけだ。月に二度の手紙を出す位のはしてくれてもいいと思ふ」(同年8月3日書簡)、「月に二度手紙を書くことは絶対の義務と心得てほしい」(同年8月10日書簡)、「月に二度づゝ手紙を書く義務は励行して貰ひたい」(同年8月28日書簡)<sup>11)</sup>など繰り返し妻に頼んでいるので、こうした内容となるのであろう。なお次郎は、3月2日頃に本書簡を落筆している<sup>12)</sup>。

和辻哲郎(1889-1960)が送った写真を次郎が受け取って、前年11月25日に恒に感想などを送っており<sup>13)</sup>、「頂いたお写真を」以下の話題は、それに関する恒の所感であろう。「敬坊のおペ」は、前年11月2日次郎書簡(恒あて)に「(筆者注：下宿先のドイツ人の)老夫人が敬吾に贈物をすると云って毛糸のジャケットを編んで送った」とあるので、それを指すと考えられる<sup>14)</sup>。

【資料2】同年1月9日 阿部六郎書簡<sup>15)</sup>

お手紙を頂いてからもう一と月たちました。御返事が又遅れてしまひました。

兄様が伊太利に移られてから、もう二週間ぐらゐになる頃と思ふと、こちらの便りを待つて居られる兄上に、怠けてみた自分がすまなく思はれます。

けれど、どうぞご安心下さい。私達山形の一同はいたって無事にクリスマスを送り、新しい年を迎へました。みんな仲よく愛し合つて平穩に暮して居ります。

雪に埋れたこの街の生活は、眠くなる程静かで単調です。痛い程熱いもの、狂ほしいものが時々欲しくなります。そのやうな気を起させるのは、落着いてみっちり勉強のできないこの頃の、あきっぽい頭の調子からもくるかもしれません。根気の弱い自分には、ほんとに焦燥させられます。けれどもこの小さく澱んだ灰色の中におさまつて、すりへらされて行くのは耐らない気がします。高峻なラディカルな生き方が慕はしくなります。烈しい恋愛が欲しくなります。常識的な均衡を焼きつくして高調されてゆくエルテルの純崇な天才的情熱があつたら、あゝした悲壮美の中に身を滅しても悔ひない気持なのですけれども。わるづめたく醒めて、こせこせと自分を失ひきれない私には、たゞくすぶることばかりが許されてゐるのでせうか。とまれ私は、くすぶりには不満です。せめて意欲において誠実でありたい、真摯でありたいと思つてゐます。

母上は去年の秋、一度やはり胃腸で十日ばかりやすまれました。その時丁度気管も悪く、喀血などもあり、一時心配な様子でしたので、早速兄上にもお知らせしたのでしたけれど、それまで四銭で行つてみた葉書が四銭の不足で戻つて来て、その時にはその文面では強すぎ、却つて無益な心配をおかけする程ずっとよくなつてゐて、間もなく癒られたので、そのまゝお知らせせずにもたのでした。

その後具合よく身体も肥られ、この正月にも働かれましたけれども、今の様子ではたふれそうもないと自分で言つてゐられます。たゞ今迄の女中が帰るのに、代りのものが見つからないで困つてゐる処です。

ハイデルベルグのエリザベト様からハンケチを頂いたのに何を御礼にあげたらいいだらう

と色々考へて居られたのですが、分らないから私達の写真でもあげやうかなどと話してゐる処です。漆器か、日本草花の種なんかよくはないかと思つたんですけど、どうでせうか。英語のできる方でせうね。ドイツ語ではまだ手紙が書けませんから。四人でをられた小さな写真、中野の姉様から送って下すつて拝見いたしました。

伊太利は私の一番行って見たい国です。ミニヨンの歌を思ひ、伊太利の古い街を背景に草原に横つたゲエの絵を思ひます。南欧の早春はどんなにいゝでせう。

今年は、日本は雪が多いやうです。山形は一尺くらゐですけども、庄内の方では一丈くらゐあるところもあるそうです。星座の荘嚴な夜、真白い街を歩いてゐる時など、きれいな童話の世界に息づいてるやうな気がします。

私達は明後日から又、授業が始まります。いゝグルッペを恵まれてるので、しあはせです。ファウストは十二月でhexenkücheまでアりました。三学期の中に第二部に入る筈です。その先生も、今年の秋ドイツに行かれるそうです。

もう電燈がつきました。懐かしい炬燵の夜が来ました。お身体くれぐれも御大切に願ひあげます。さやうなら。

一九二三年一月九日

六郎

兄土様

資料2は末弟の阿部六郎(1904-57)からの手紙で、19歳の若々しい気持ちが記されている。この頃の六郎は、自身について日記に「真実の自分を見失つてゐるはがゆさに促されつゝも、たゞ焦燥を感じるだけで、その根本的な探求に勇猛精進して行く気力の乏しいままに埒の明かぬ」云々、また「自分はどれほど頹廢し傾滅したかしのれない……殆んど愛慾に氣をとられて暮した。自分を深めて行く営に怠けた」とも記している<sup>16)</sup>。そうした葛藤を兄に語っているように見える<sup>17)</sup>。

【資料3A】同年2月6日 阿部富太郎書簡(次郎あて)<sup>18)</sup>

十二月拾五日付書面、去一月末着。大に安心せり。こちらは大した変りはないが、由紀は感冒去らず、今日まで廿四五日、全快とはゆかぬ。然れども一昨日よりは炬燵に起きて居る。文子手伝に来て居るから如何様にか間に合つて居る。○三月末には東京に行って神保博士に見てもらつて、それを楽みにして居る。○六郎は可なり健康で此の寒中多く足袋も用ゐなかつた。余り丈夫でなくてもよい拙者は、れうまちすも起らない。毎朝水垢離もとる。此前の日曜朝には山高生と撃剣までやったが一向差支はない。此健康を半分由紀に譲りたい位だ。○私の最も懇意にして居る山形市第三小学校長村山忠太郎氏の今日態々来訪、学区内懇志者より六百円寄附せられたる故、次郎先生に御願して何とかして「ピアノ縦型七オクタブ位にて山形まで送費全般にて六百円位の品」備付けたいとの切望、正金は何時にも電報為替にて送金するとのこと、誠に迷惑とは察するけれども余りの懇請無下に辞ることは出来がたく茲に紹介することにした。何とか都合をつけてくれる訳にはゆかぬか。勿論ドイツ再遊の頃にて可ならん。○ドイツ夫人の不幸憫察する。挨拶状だけでも上げたい——と言つては居けれども未だ遂行せず。日本文にても宜しからうと言ふけれども、それではとの反対論多数、問題の通過中々困難。○余、六郎より。

二月六日  
次郎殿

禿翁

【資料3 B】同年2月14日 阿部六郎書簡（次郎あて）<sup>19)</sup>

バアゼルからのお便り拝見致しました。ご健康の由、一同喜んで居ります。

母上は正月すぎから感冒で長い間休まれました。その間手伝ひに来てみた文ちゃんは一昨日帰り、今は私達だけで家の始末をしてゐるところです。昨年から小使のここに来てゐる十三になる女の子が台所の方を受持つてゐるので余程助かつてゐますが、女中がなかなか見当たらないので困って居ります。母上は感冒の方はもういいのですが、胸の骨膜炎の痕が今度の病気のためか又うづき出してゐるのです。どう経過して行くものですか。明日は病院に行つて見て貰ふつもりです。

二月には是非一緒に東京に行きます。もし骨膜炎の手術でも必要だったら、それも東京の方がいいことと考へてゐます。その時には文ちゃんも一緒に上京する筈です。私は広嶋の方まで遊びに行つて来やうと思つて居ります。

幸ひ今のところ、母上も胃腸の方は何ともありません。骨膜の方さえ大事にならなければいいのですが。経過は追々お知らせいたします。

この前のお手紙を読んで独逸人の窮乏に同情に耐えませんでした。リッケルトや、その他いゝ学者や芸術家が、日本に来て生活すればいゝなど話してゐます。

吹田先生は二月の初め山形に帰り、一週間ばかりゐて、上京されました。教室で独逸人の時間<sup>(ママ)</sup>に鳥渡、顔を出されたゞけで、お話を聞く機会もありませんでした。十日の晩、宿にお訪ねした処生憎お留守で、翌日友人に聞くと、もうその晩の中に上京されてしまったといふので、ゆっくりお会ひしないでしまひました。四月までは東京においでなそうです。色々兄上の御動静なども詳しく伺ひたかったのですが残念でした。

今日は伏見宮の国葬日で休日です。

今年は雪の多い年でしたが、昨今はうらゝかな日が続いて、春めいた気色<sup>(ママ)</sup>がだいぶ見えて来ました。

常散の凡夫の身には、あまりに萎えやすい精進の要求が大地を抱擁したいやうな生活衝動といっしょに今蘇つてゐます。Lebens Quelleに突き進みたい気持です。一方あらゆる生の色彩を胸に吸ひ込みたい気持です。

ファウスト第一部を今日読み了る筈です。

ハイデルベルグの奥様には父上が大袈裟なことを言つてゐますが、こないだ独乙人が家に来た時書いて貰つて手紙をお送りしました。英語でなら私も書けたのですが。

御健康を祈り上げます。さやうなら。

二月十四日  
兄上様

六郎

資料3のA Bは、一つの封筒に同封されていた同居する親子の書簡で、Aは次郎の父（阿部富太郎、1860-1928）、Bは末弟（六郎、前出）からの手紙である。Aはまず、自らと妻（阿部ゆき、1863-1927、次郎たち母）など家族の体調を記す。続いて要望を一つ記すのだが、これについて

は次郎が発信した書簡に関連する記述があった<sup>20)</sup>。

(前略) 父上の御手紙にあるピアノの事は承知しました、今度ベルリンに行ったときにきいて見て金が間に合うようだったら送らせます。三菱では商売ですから勿論喜んで世話をする筈です。ただ運賃もいれるとなると少し足りなくはないかと思ひますが五六十円位のたし前は出来ないでせうか。金は品物がついてから日本で一切支払ふやうに談判することが出来るから送るに及びません。

前後の阿部次郎書簡(全集所収)を点検しても話の概要が不明で、どうやらピアノを買いたいという話らしいが、誰が何のために?という疑問が残った。しかし本書簡の発見により事情が解明された。洋行している息子に対し、地元山形の小学校長からの要望が伝えられ、次郎はそれを果たすことを約束していたのである。

一方、資料3Bは主に母(ゆき)の体調が話題になっている。感冒は快復したが胸の骨膜炎を患っていること、「文ちゃん」(長兄一郎の次女の阿部文子、次郎や六郎の姪)の助けを借りて東京での療養も考えていることなどが記されている。これも家族の消息を求めるという意味で、資料1同様に次郎の希望を踏まえている面があるように見える。なおLebens Quelleは「命の泉」。

資料3Bはその他、第一次大戦後のインフレ下のドイツ人窮状に対する所感や、「吹田先生」の動向<sup>21)</sup>を知らせるなど、公開済の資料に新たな情報を加える記述も散見される。

【資料4】同年4月26日 竹岡勝也書簡(次郎あて)<sup>22)</sup>

暫らく御無沙汰して居ました。兄上はもうそろそろローマ<sup>(ママ)</sup>を立たれる時分だらうと思ひます。エジプトや伊太利が色々な意味に於いて兄上の興味を誘った事は遙かに想像致して居ります。

東京は別に変わりなく、中野の家でも皆様御丈夫で居ます。母上と六郎とは今月の十日過ぎに山形に帰って行きました。文ちゃんも来ましたので嫂さんは大変でした。併し母上は非常によく神保様に診察して戴いて喜んで帰って行きました。委細は三世兄上の方から申し上げてある筈ですから、その事は今申し上げません。後には文ちゃんが一人残って居りますが、文ちゃんは指を手術して貰ひたいと云ふので大学病院に通って居ります。その関係で今は私の処に宿って居りますが、此の方も昨日二度目の手術が終了しましたから、傷がよくなり次第帰って行く事になって居ります。文ちゃんを中野の方にと云ふお話もありましたが、一つは養徳園に今下女が居なくなつて居りますので、母上の方へ時々手伝ひに行かなければならない関係や山形の嫂さんが離したくないと云ふ事などがありまして、矢張り帰って行く事になるだらうと思ひます。

私の処では三月の末に女の子が生まれまして洋子と名付けました。山寺の芳のお母さんに二ヶ月ばかり手伝つて貰ひました。併し今度は二人共大変丈夫で居りますから御安心下さいませんか。

それから私は和辻様からお話があつて四月から法制<sup>(政力)</sup>の子科で四時間宛西洋史をやつて居ります。色々兄上の友人の方々にお目にかゝつて居ります。生徒が多いのでなか〜疲れますが割合に面白くやつて行けさうです。役所の方を止したいと云ふ考へもあつたのですが、四月

からの神社調査会と云ふものが出来る事になりましたので当分留まる事に致しました。和辻様とは毎木曜学校でお目にかゝる事になって居ります。

小島君は多分巴里で兄上にお目にかゝれる事と思ひます。何んなにして居るか気になります。唯金の方が何んな具合かとその事丈が案じられます。あんまり節約した為め<sup>(栄カ)</sup>營養不良で病氣した等とも云って来ました。もし兄上がお会いする機会がありましたらよく注意を与へてやって下さいませんか。創作は色々な関係で未だ行き悩んで居ります。

東京はもう初夏になりました。今年の春は中野の庭にも色々な花が咲きましてよく貰って来ては書齋に立てたり致しました。嫂さんも色々興味を持ってミシンをやったり編物をやったりお菓子を拵しらへたりして居るやうです。敬ちゃんも大変大きくなりまして叔父ちゃんや伊藤さん等男の人を大変好くやうです。お帰りになったら何んなにか喜ぶ事と思つて居ます。私の家の庭も未だ春の名残りで椿が咲ひたり木蓮が咲いたり白藤が咲いたりなか〜賑やかです。新緑の美しさも此の頃が一等かと思ひます。一寸郊外に出ますと見渡す限り未だ萌え出たばかりの柔らかな緑の色が続いて居ります。近頃私はよく金沢文庫に行きますので今年は例年になく春らしい又初夏らしい気持ちに包まれて居ます。

今日本文学史らしいものを書きたいと計画立てゝ居ります。少し文学らしいものに触れて見たくって仕方がないのです。

いづれ今年の秋にはお目にかゝれる事を楽しみにして居ます。事に依つたら是が最後の手紙になるかも知れませんから何卒お体を御大事に御元氣でお帰りになられん事をお願い申し上げます。

四月二十六日

勝也

兄上様

資料4は、弟の竹岡勝也(1893-1958)<sup>23)</sup>からの書簡で、まず兄弟の母(ゆき)が山形の家(養徳園)から上京して診察を受けた話<sup>24)</sup>や、次女(洋子)の誕生と義母の支援など、家族や一族の消息を報せている。また自身のこととして、和辻の仲介により、法政大学で西洋史の講義を受け持ったことなどを記している。阿部次郎と和辻夫妻の密接な交流については知られているが、それが次郎の兄弟にも及んでいたことが分かる<sup>25)</sup>。「小島」<sup>26)</sup>との交遊や、日本文学史への志向など、竹岡に関する新たな情報を加える記事も見られる。

【資料5】同年6月14日 阿部恒書簡(次郎あて)<sup>27)</sup>

段々お暑くなります。この手紙の着きます頃は随分お暑い時で御座いませう。しばらくお便りが御座いませんが御機嫌よく<sup>(ママ)</sup>入らっしゃいますか。此方は皆々丈夫で御座いますから安神下<sup>(心カ)</sup>下さいませ。此の間敬坊がはしかを致しました事を申し上げましたが、はしかは難なく発しんも致し熱も余り高くなくて「今年のはしかは一般に重く熱は四十二度位に上る人も有ると聞きましたが」それにしても軽い方で御座いました。処が其の頃丁度寒かったり暑かったりしてよくない時候で御座いました為か、気管支カタルを起しまして一旦過ぎました熱が又九度内外に上り、十日計り続きました。扁桃腺も並発致しましたので、一時は四十度五分位も御座いまして、なか〜心配な容体で御座いました。藤井さんと中谷さんとに立会って診

察して貰ひましたり、手伝の人を頼んで私が夜昼着きつきりで手を尽しました。それで漸う肺炎にならずに済みました。発病以来二週間もかゝりました為に顔色もなくなり少し瘠せて参りました。まだ咳はすっかり直りませんが、今日から外に出て日光に当る事を医者から許されました。久しぶりで外に出まして大喜び致しました。今日は大層元気で一人で立ちましてタッタ〜と云って得意で居ります。まだあるく事は出来ませんが此の分では程なく歩けるで御座います。此の度は本当に心配致しました。遠く離れて入ら<sup>(ママ)</sup>っしゃる事をしみ〜悲しく思ひました。余所の話聞いて見ましても皆二週間、三週間はかゝって居りますから、今から思ひますれば特別に重かった訳ではない様で御座いますが、毎日〜熱が高くて呼吸も苦し相に見えました時は、どうなる事かと思はれました。もしやの事が有りましたなら自分も生きて再びお目に懸る事は出来ないと思ひましたが、かうして直って見ますと又望のある世に立ち帰りまして、後四ヶ月足らずでお帰りになると思ひますと胸もとどろく様に嬉敷思はれます。子供達もお帰りの日の近づくのを数へて喜こんで居ります。

六月十四日夜十一時

つね

次郎様

この可愛い花はちこちゃんからお父様へお目に懸けます。

十一月末と十二月初の手紙はお受け取りにならなかったかと思はれます。

以前頂いた御手紙について色々考へましたし又此の度の様な深い心配や又それに続いた喜びに会ったり致しますと自然我儘でない本当の心持になる事が出来ますから一筆自分の思い〜をお答へ申し上げます。私は今迄の様に決して自分の立場からあなたに御迷惑をかける事はしない積りで御座います。あなたはどうぞ私を足手まとひと思し召さないで凡てを御自分の思召す儘に行なって下さいませ。私は一切をあなたの人格に打任せて、それで満足して一生を終り度いと思ひます。そして私はこの可愛い敬坊を人にしなければならぬと思ひます。今度立って呉れましたにつきまして、どれ程可愛い〜かといふ事もしみ〜と感じました。親が居なかったなら此の子は弱くはないかと思ふにつけても、自分の身が生きて居るといふ必要を感じます。私は一日も早く死ぬ事を希ひながら、矢張又そういふ事を思ふ様になりました。それで私が生きて居る為に一生あなたに御迷惑をかける事を済まない事だと思ひます。今迄永年私の為にどれ程お苦しみになったかと思ひますと、本当に〜お気の毒で御座います。私はあなたとの間が友情に変わったからと申して決して此の世でも来世でもお互に離れて仕舞はうとは思はれません。愛し合って行かれはしないかと思はれます。私は非常に欠点の多い人間で御座います。今迄かうして暮しました事も皆々自分の足りない為だと思ひます。さう思ひますれば決してあなたに対して不足がましい事は思ひません。又今迄情ないと思つて悲しい余りつれないお心をお恨みした事をお許し下さいませ。人窮すれば父母を恨むとかいふ言をおくみとり下さいまして、どうぞお許し下さいませ。でも決して心からあなたを悪く思った事は有りません。只今思ひ切つてこの手紙を書きましたが涙は止めどもなく流れます。あなたのお心はいつでも温かいと思つて居ります。懐しい親しい目と目を見合はす事の出来ます事を信じて居ります。一刻も早く御目に懸り度くお帰着の時はお迎に参る事をお許し下さいませ。

六月十五日〇時半、敬坊が時々泣きましたり、又外の子供にお布団をかけたりしながら永々かゝって書きましたから、変な所が沢山御座いませうが意味丈はとって頂けるだらうと存じます。

資料5は妻からの手紙である<sup>28)</sup>。例によって、子供たちの近況に多くの言及がある。一方、後半の「以前いただいた御手紙について」以下は、恐らく前年の年末に次郎が出した手紙への回答と思われる。次郎は1月1日の妻あて手紙に、内容不明ながら「二三日前に出した手紙は劇しすぎてお前を心配させたらうと思って気にしている」と記しており<sup>29)</sup>、実際本書簡では種々の詫言が見られる。子息の敬吾の発熱に関して「もしやの事が有りましたなら自分も生きて再びお目に懸る事は出来ない」と述べ、また次郎に対し「私が生きて居る為に一生あなたに御迷惑をかける事を済まない事だと思ひます」「今迄永年私の為にどれ程お苦しみになったかと思ひますと、本当に――お気の毒」「私は非常に欠点の多い人間……皆々自分の足りない為」など資料1にも増して、ともすれば謙遜を通り越して自虐に近い態度にも思われる<sup>30)</sup>。一方で、あと「四ヶ月足らずでお帰りになると思ひますと胸もとどろく様に」嬉しいとか、「子供達もお帰りの日の近づくの数を数へて喜こんで」いる等、次郎の帰国後に希望を持たせる記述も見られた。

## 2. 福井利吉郎からの手紙

家族からの手紙の基調は、次郎を頼もしく思う気持ちに代表されるといっても外的外れではないように見える。ここでは別の立場として、後に仙台で同僚となる福井利吉郎（1886-1972）の書簡を取り上げる。彼は1922年（大正11）6月27日に横浜港を発ち米国経由で渡欧、1924年9月6日の帰朝後に、東北帝国大学教授に就任する（在任は同年10月～1946年9月）<sup>31)</sup>。阿部次郎より3歳若いほぼ同世代といって良く、阿部を含む多くの人々と遊学の時期が重なっていて<sup>32)</sup>、欧州内から阿部に送った書簡5通が確認できる。

【資料6】〔1922年（大正11）〕10月5日 福井利吉郎書簡（阿部次郎あて）<sup>33)</sup>

漸く倫敦に着いて半月。毎日Stein Collectionに没頭して、他を顧みるひまが無い。<sup>(ス脱カ)</sup>クリスマス送る渡仏の予定も未では心細い。君は独逸の冬を避けて伊太利行の計画でもあるのでは無いか。近況を知らせ玉へ。僕も更めて書く。

十月五日

利吉郎

資料6は福井がロンドンに着いて多忙な中で送られた挨拶状的な手紙で、両者がすでに十分親しくなっていることを思わせる<sup>34)</sup>。その2か月後には、次の手紙が出されている。

【資料7】同年12月12日 福井利吉郎書簡（阿部次郎あて）<sup>35)</sup>

今日初めて兎島からの端書を得て嬉しかった。「阿部君からののがきで」僕の倫敦に来てゐる事を知ったといふのには驚いた。伯林大使館宛に出した僕の手紙は届いてゐないのだ。六月に日本を立った時電報に返事したのも届いていないのかも知れない。独逸にゐて伯林大使館に届けられないのも兎島のやり相な事だ。

此間の御端書でシュマルソウ文庫の買へた事を知ったのは嬉しかった。あれには大塚先生の

好意に負ふ所が多いから、早速挨拶して置いた。

佐藤氏から其の電報を君に打つと同時に僕にも good の返電が来た。然し夫れは亜細亜協会雑誌のバックナンバー丈で四十五号許なものだからつまらない。他の書物についての手紙の返事は中々得られそうもないね。

こゝは相変らず暗くて困る。然し仕事は油が乗って面白い。トテモ仕上らないけれど年末一杯居て巴里へ移る。小林・前田両兄との再訪を期して。

僕は印度行の季節の関係上、来年十月一杯で欧州を切上げねばならぬが、其間に専攻の仕事をする丈が随分重荷だ。仕事に際限が無いといふものゝ与へられた時は余りに無理があると思ふ。君は大分無理に注文を受けてみたのをどうする予定か、又「きめられた事」を「改善」するのはどういふ方法があるか、伝授を願ひたいと思ふ。

十二月十一日夜

利吉郎

阿部学兄 座右

資料7の冒頭で話題になっている児島喜久雄(1887-1950)<sup>36)</sup>は、著名な美術史家で、後に東北帝国大学の同僚として福井と関係を結ぶことになる。彼は福井より僅か1歳年下で、1921年10月に日本を発ちこの時期は欧州にいた。阿部とは既に親交が深く、この年1月のエジプト旅行にも同行しているが(前出)、これまで福井との面識は無かつたらしい。本書簡からも、多少相性の合わない様子が窺える。「シュマルソウ文庫」は、ドイツの美術史家でライプチヒ大学教授であったAugust Schmarsow(1853-1936)の旧蔵書で、最初は東京帝国大学と購入交渉があったが、東大の蔵書と重複が多いため、東大の美学の教授だった大塚保治(1869-1931)の仲介で東北帝国大学が購入することになったものである<sup>37)</sup>。大塚は漱石の親友で、阿部の恩師であり、福井とも旧知の仲であった。また、小林古径と前田青邨の両画伯は、この頃日本美術院留学生として欧州に滞在し、福井の依頼で大英博物館所蔵「女史箴図」の模写を行っており、その話題にも触れている。

【資料8】同年12月20日 福井利吉郎書簡(阿部次郎あて)<sup>38)</sup>

親切な御手紙難有う。埃及行は好い道達で羨ましい。僕は英大博物館の宝庫に入りながら希臘・埃及に魂を打込む事が出来なくて、西域の田舎芸術に没頭してゐるのを極東に生れた前世の因果だとあきらめてゐる。然し西域ものもこゝ程豊富にあれば研究としては実に愉快だ。日々喜を新にしてゐる。出来る丈け仕事を続けて見て一層具体的に巴里・柏林の同種のもの、印度にある同じスタインものなどの定まった仕事の予定のついた上で、再訪の上御注意の如く交渉を初めて見やう。大兄の来秋帰朝後でも電報さへ貰へばまた合ふ事だから最後は御厄介になるやうな事になるかも知れぬ。

善一郎君には時々書いたが、太田君には巴里から消息を貰ったきりになってゐる。宜しく。今日東京の便りに次の一節がある。

——今朝の新聞に帝大倫理専攻の学生(三年生、友枝さんの御弟子)が愛の為に養父母を斬殺し己れも其場で縊死を遂げた、あはれな記事が一杯に出てゐた。其学生は早大教授片山伸氏の実弟(二六)で竹内仁といふ人、最近雑誌の新潮に論文を出て阿部次郎さんに一本突込んだ評判の青年思想家であるとの事。被害者は前早稲田中学教師資産家橋本武といふ夫妻、

何でもその次女（十七）と婚約の中であつたのを新旧思想の衝突が動機で割かれた愛の果の非劇(悲)云々。

旅は自重したまへ。善一郎さんの所謂「手品のやうに明るい夕暮の空」が慕しい。

十一年十二月十八日夜ロンドン

利吉郎

阿部学兄 座右

資料8からは、福井が研究に励んでいる様子が窺える。加えて注目したいのは「東京の便り」の「一節」である。そこには、阿部の論敵であった竹内仁の自殺に関する情報があった。阿部が外遊前に論争を行った竹内は、阿部が欧州滞在中の1922年（大正11）11月10日に（資料8に書かれている通り）自殺を遂げた。阿部が竹内の死をいつ、どのような形で知ったか寡聞にして不明だったが、少なくともこの時点で認識したことは間違いない<sup>39)</sup>。ただしそれについて阿部がどのような思いを抱いたかは、管見の限り分からない。ついでながら、竹内の師として名の挙げられた友枝高彦（1876-1957）は、福岡県出身の倫理学者で、1916年から東京帝国大学の教授であった。

【資料9】1923年（大正12）3月18日 福井利吉郎書簡（阿部次郎あて）<sup>40)</sup>

今日は殆ど半月ぶりに日光を見る。日曜ワレースコレクションにいく気持になって倶楽部に寄ると、いつも余り興味をひかぬ日本新聞の卒論(ママ)の中に、ふと児島の助教授任命の辞令が目に着いた（二月五日大阪毎日）。本人も君もまだ知らぬのでは無いかと思ふから不取敢報告する。此分なら留学の方も少しは遅れても確かだろう。

其後の伊太利は如何。巴里の東洋物を勉強出来ぬのがまだアキラメ切れない。個人集蔵も見たいのが多いのに。

三月十八日夕

利吉郎

阿部学兄

資料9で福井は、児島喜久雄が東北帝国大学の助教授（西洋芸術史担当）に任命されたことを初めて知ったと述べる。この人事は、福井が求めたわけではないようである。その他、ロンドンの美術館The Wallace Collectionに行こうとしたことなど、近況が記されている。封筒の情報から、この時期の阿部はフィレンツェのアルビオン・ホテルに滞在していることが確認できる。

【資料10】同年5月15日 小林古径・福井利吉郎連名書簡（阿部次郎あて）<sup>41)</sup>

其後はどーになりましたか。五月中旬にこゝへ参り、又明日巴里へ帰ります。 小林茂

模写が完成して嬉しい。顧愷之には随分苦しんだ。夫れ丈け両君には敬服し又感謝してゐる。

僕の仕事はまだ之からだ。

利吉郎

大正十二年五月十五日 英国

資料10は福井・小林の連名書簡で、前述した（資料7）小林・前田両画伯による「女史箴図」模写の完成したことが述べられる<sup>42)</sup>。なお「小林茂」が本名で、号が「古径」である。

阿部のイタリア滞在は5月20日までで、封筒の情報から、実際の受け取りはパリに移動後だったようだ。

### 3. 1923年の福井から阿部への書簡

関東大震災の報をうけ阿部が帰国を早めた（1923年9月マルセイユ発）後も、福井は一年近く欧州に残り、阿部との文通を続けている。当初の予定からは多少外れるが、イタリア滞在期間の後日談として、1923年（大正12）秋からの両者の文通も見ていきたい。

【資料11】1923年（大正12）10月28日 福井利吉郎書簡（阿部次郎あて）

阿部学兄

君がこゝを立(発)ってから五十日近くになる。君の家族と家の安全は、其後こゝにも来るやうになった直接の報道で確信してゐるが、(ママ) 廢残の都を一年半後は見出した者の感懐は推察は余り有る。(ママ) 心配な友人知己の消息は今では大抵知れたが、上野丈けが今はわからない。其後思付いて紐育の弟君に聞いてやった。返事も無いと案じてゐると、之は早くから帰朝してゐるらしいと此次聞いた。九月廿三日迄の家信にも、上野の方へはこちらから見舞った手紙に返事無しのみである。どうも之れ許りは君の第六感の權威を認めたくないと念じながら、不思議に迷信的にも気がかゝる。今週のメールで、恐らく此の不安も一掃されると信じながら。君はモウ仙台に移った事と思ふ。廢残の東京が君に住むに堪へない気持を与へて、家族を挙げての転居である事をも僕には望ましい。一つ想像として思浮べた事も有る。学校については君からの報道を何より待ってゐる。

其後の僕には報ず可き事が可も多い。其前君の滞巴中、僕には最初から或度(程脱か)の病的時期であつた。屹度其間を君から、君は意識しなくとも、自然に労はって貰つてゐた事を感謝する。其後も十日余りは、殊に東京を思ふ不安に寂しい絶頂にあつたが、廿四日佐藤学部長から留守宅無事の電報を得たのを一転機として、原君夫妻にも喜ばれる程に気持を一新した。

初めて仕事に気を向けると、ペリオのいつ迄も煮え切らぬ態度に漫然としてゐられなくなったから、最初の一の予定でもあり、十月の最好季節を倫敦の仕事の継続の為に再遊する事として、ペリオに、かねての協同の仕事が始まる様なら確報が有り次第いつでも帰巴する事を伝へて置いたら、此の多少日本的な外交が功を奏したのか、滞英中彼からの確報を得たので、略ぼ予定の四週間で又こゝに引返した。そして直々にループルのペリオコレクションから撰定複製する目録の写真と編輯の一部に協力してゐる。

倫敦の方は比較に成らぬ膨大な資料で、今度も着手すると十月中ではとても見込がつかず、来春四月の他の好季を期してゐたので、三遊する事に決めてゐる。此の倫敦の仕事は君の立つ前一寸話した時は成算が十分で無かつたが、弥々根本的に重要な資料の写真撮影を計画し着手したのが其の主なものである。之については費用の点を学部長に相談する為め詳細報告すると共に、君にも改めて書くから助力を冀ふ。此の経済問題を除いては倫敦の方は凡て直截簡略に運ぶので気持よく——天候の不運を除いては——進んでゐる。巴里の方はペリオ自身にさへま(加カ)ならぬ博物館当局が介在するし、此先どうなるか。僕もい(発)可減見切をつけて、柄の無い「外交」など余りやらぬ積りである。然し今度の機会に遭遇した事は僕の為めに、或はペリオの為めにも仕合だつたと思ふ。

倫敦を立つ前(発)（拾月廿五日）法文学部の君宛に、顧愷之画卷写真一組を送った（君のいつか見た大原寸写真六枚と、巻首、巻尾の小原寸写真二枚、併せて八枚）。之は本来、大和絵同好会の複製刊行用原印画として上野に贈る事を約束してゐたものである（此他に今一組を横

浜原氏に贈った)。然し、同好会の刊行といふ事も今では何時になるか、どうなるか僕には見当がつかぬし、又其用と上野の絵巻物研究の資料以外には僕の帰朝前此の印画か他に利用される事を欲しないから、上野へ贈る筈のものを、君には迷惑ながら、次の条件で君に管理を託する意味で送る事にした。

- (一) 上野の要求にあつては何時でも之を渡して貰ふ事
- (二) 大和絵同好会が之を刊行する計画が確立した場合には、上野がたとへ無関係でも、其責任者(中川忠順氏、安田鞞彦氏の如き)に渡して貰ふ事
- (三) 以上の条件具満せざる場合には、此印画一組は法文学部所蔵の右原版と共に学部所蔵のものとする様に僕の帰朝後手続する迄預置を冀ふ事

君には言ひ漏らしたかと思ふが、此の撮影は例の原家から預かった五百円の金の中から費用を弁じたもので、其原板(之は右印画以外画卷の附属部をも含むので枚数が多い。其詳細目録を附し本年八月中、学部長宛に送り済みである)と印画一揃は僕の帰朝後、原家寄附のものゝ一部として手続すべき筈である。今、同好会即上野に宛てたものは、僕が自腹で会へ寄贈の意味で用意したものと承知を乞ふ。

今一つ此の写真に就て「学部」と「上野」との中間に立って貰いたいのは、上野から「原板からの複写」を希望した場合である。此の場合の事は震災以前上野へ書いた手紙に、君を煩はす様に置いて置いた事である。然し倫敦の印番は、あの原版から期待し得る最善の印番と信ずるからそう云ふ必要は恐らくあるまいと言添へて置いた事である。又学部保管の原板から印画する場合、無論此の貴<sup>(重カ)</sup>な原板を東京迄持出す事は断つて貰はねばならぬから、仙台であの格外の大原板を印画する事は事実上不可能ではないかとも思つてゐる。只万一の場合を御願する。

雑用許り、例の悪字で君を苦しめて済まない。書きたい事が多いが、近日写真の事でもっ度君を煩はさねばならぬから、之で控へやう。

巴里にも秋が深い。原君からはミラノ、ペロナと自然にも芸術にも共に恵まれた様なよい便りが続いてあつた。君の所にも同じ様に行つてゐるだろう。僕もモウ、フィレンツェ迄の切符を買つてゐるのだから「西域物」の縁はまだ離れなくても、意は「伊太物」に動いてゐる。切に自愛を祈る。仙台の最初の冬が健康を害さぬ様に。

大正十二年十月廿八日巴里

利吉郎

僕は多分十一月末フィレンツェに行くだらう。二月中位伊太利にゐるだらうか。手紙は巴里宛に貰つた方が却て好都合だ。

資料11は、1923年(大正12)10月末に書かれている。9月上旬に阿部が欧州を発ち、既に帰国していることを前提に、関東大震災後の東京や、その地の知人を気遣う言葉から始まる。阿部は東北帝国大学赴任の際に、単身赴任か家族を同行させるか迷つたようだが、震災後の東京の荒廃を避けるため一家で仙台に移つた。福井はそれを歓迎している。福井も震災後に一時気落ちしていたが、東北帝国大学法文学部長の佐藤丑次郎から家族無事の電報をうけて、気分を一新してパリでペリオコレクションの複製作成などを始めたことを報告している。また大英博物館で模写を作成した「女史箴図巻」写真などについては、制作に関わる経費を支援した原富太郎(1868-1939、三溪と号す)に配慮しつつ、大和絵同好会や東北帝国大学の双方が納得する扱いについて

阿部に相談している。

【資料12】同年11月2日 福井利吉郎書簡（阿部次郎あて）<sup>44)</sup>

阿部学兄

前信に残して置いた用事から書く。之と同便で学部長宛に「書物購入」と「写真撮影」とに関する詳細な相談の手紙を書いて、写真の撮影の方については特に君に前に話した事もあるから、其の書面を君にも見せて呉れと書いた。「書物」の方に関しても我等方面は学部長には不案内な筈だから、自然君に相談してくれ<sup>べ</sup>ば<sup>い</sup>と思つた。夫れは審美書院の代表的出版物を倫敦のエーゼトルを在貨のあるのを幸に、こちらで買ふ事の可否だ。然し夫れよりも君に僕から相談したいと思ふのは「写真」の方だ。詳細は学部長宛の手紙に譲る。君と分れる前に、まだ計画中で未熟だから僕の方での写真は後から書くといった、あのスタイン、ペリオ物の写真に関して其後十分に考を練つて見た。僕は云ふ迄もなく、日本に帰つた後に東洋美術史の研究室として欠く事の出来ぬ写真其他の材料を集めるのに主力を注がねばならぬ。其の大局から見ればスタイン、ペリオ物は決して主要なものでない。然し云ふ迄もなく材料として極めて珍奇なものであり、或度迄は重要であり、又日本の学徒が之を常にオリジナルに就て利用し、時には遺憾を除く為めには寧ろ豊富に過ぎる共、貧弱に落ちぬやう十分な研究材料を材料其物として日本に持帰りたと思ふ。たゞ大局から見て之に過分な費用を投ずる事を将来の計画の為に不得策と思ふ。之が僕の根本方針である。之によって具体的に種々計画した結果、千円乃至千五百円を撮影費用に当て<sup>ば</sup>百数十枚の画、二百数十枚の写真を得たいといふのが私案である。其の具体的計画の詳細は部長宛に書いたが、此の根本方針に就ては一言もしなかつた。之は君は恐らく僕に同感して呉れると思ふから、更に敷衍して説明して貰いたい。僕の希望である。なほ僕は此の写真費は学校で出なければ、斎藤財団に出費を仰ぐのが最も当然かと考へて、其の希望を述べた。之も君に異存の無い事と思ふ。幸いな事に僕は在留延期の費用を「補助費」として既に送金を受けた。其金が今、遊んでゐるのを利用して、専断ながら実行に着手し、四度の倫敦滞在中出来上つたもの対しては既に廿五磅を支払つた。此事も学部長には特に書かなかつたから、君から「裏面事情」として伝えて貰つた方がい<sup>い</sup>かも知れない。

此の出来上つた写真は今君に見せられぬのを遺憾に思ふ程、写真として実によく出来てゐる。原版共日本に持帰り得る。元から其費用も、日本のを知る君は決して不廉と思はないだろう。僕は此の写真の出来栄に対しても、撰定と監督との責を深く感じてゐる。

我々の研究室の将来の完成を思ふと、真に多事である。特に東京の大災後の事情は不安を深くするが、大阪と京都に此方面の可也シツカリした書肆もあるし、又何とか通ずる途は有るだろう。「審美書院物」と今時は「国華社物」についても心配してゐるが、君の閑暇の時之等最近出版の美術書中代表的なものに付ては（明治以来）蒐集を心配して貰へないだらうか。僕の帰朝後では右は期を逸する恨みもある。「国華」の旧号位は大学図書館に揃つてゐると思ふが、其物の性質上スツカリホグシテ便利に分類したものを作る為め、研究室には之の他の一揃を持ちたい希望である。之等の事も学部長には一言しないであるから、君から僕の意向に君の所見を加へて相談から実行に進んで貰いたい。

かういふ事になると「助手」の問題が頭に浮ぶ。君はい<sup>い</sup>のが見つかつたか知ら。そして其

の助手が僕のかういふ希望についても君を助けて呉れたいかと思ふ。

僕には一人意中の男——無論まだ誰にも漏さぬ——が有るが、向ふで応ずるかどうか危んでゐる。慶応を来春卒業する筈の武藤金太君だ。あの男は沢木も英語は自分より上ハ手だと云つてゐたが、語学許りで無くいゝ素質を持ったいゝ男だが、少しよ過ぎてウツカリ云い出せない。一体東洋美術をやるかどうかは未定のやうだったが、君や児島があるのだから来て呉れてもよさ相に思ふ。此事も君丈けの意中に仕舞って置いて呉れ玉へ。

又悪筆が長くなった。今度僕は君の思出のルーズベルトにゐる事を、前には書く暇が無かつた。但し16では無く、一段上の26だ。部屋代は多分半分の筈。こゝも元気がなくて、居れば騒しいとも思はず、全体前の下宿暮しとは比較にならぬ程気がいゝ。昨日はトゥーサンで凱旋門の無名碑が花に飾られた。そこで偶然土井君<sup>(原カ)</sup>に会つてこゝで話した。

児島は今、キャンドラルシチーを行脚してゐて、近々此宿に帰るらしい。又書かう。

十二年十一月二日

利吉郎

資料12は、資料11の4日後に送信され、内容も連続している。欧州における資料収集の成果としての書物購入および写真撮影の経費について、法文学部長の佐藤丑次郎の理解が得られるよう、阿部の支援を求めている。なお不足分については、斎藤報恩会からの資金援助を求めることも記す<sup>45)</sup>。「国華」その他資料の収集についても要望が出される。また、助手の人選についても、具体的に人名「武藤金太」を挙げて相談している。ルーズベルトホテルは彼等の定宿らしい。

【資料13】同年11月9日 福井利吉郎書簡（阿部次郎あて）<sup>46)</sup>

阿部学兄

仙台の冬は本当に寒いのだろうね。巴里も二三日来メッキリ冷くなって来た。外気が風も無いのにイヤに冷い。倫敦は「霧」だらうが、かうは冷くはなかつた。此度も霧こそ無いが可也に暗い。僕の目には殊に悪い。然し兎も角も一日に朝も午後にも日光を見る時もあるから我慢出来る。僕は今写真中止で、ビブリオテークのペリオ文書とペリオ蒐集の支那の珍書を交互に勉強してゐる。予期以上に之は面白くて有益だ。写本迄もやってみる。「墨縁彙観」といふ、かねてから見たくて見られなかつた——版行等も無く火災の為め版をも失つて極小部数のみ伝はつた清朝第一の鑑賞家の古今書画通観——珍書などは今少しで写し終るだらう。支那の伝統的鑑賞に、謂はゞ西洋風或は科学的ともいふべき客観的記述を十分に交へた清朝流の著述として、実に上乘なものだと敬読してゐる。

此間色々書いて頼みながら、漏らした事がある。夫れは国華の初号から全部が東北大図書館に有るか否か、若し無ければ、或は一部は既にあつても理想としては自由に分類し得可く、他の一揃を研究室のために得たいから、之も僕の帰朝を待たずに配慮を頼む。

君がこゝにゐる時相談した事の有るグリフィス、アジャンター（六千フラン）は一応宇井に相談したのに対し、学部長も賛成したと返事が来た。然し其前に買って置いた。東京はあの通りだし、金の都合のつく限りいゝコレクションを作りたいものだ。

ペルシャものなどにはまだ——高価書で買いたいものがある。「国華」許りで無い。「審美書院物」許りで無く君の心附いた代表的なものは何分に頼む。

僕も漸々帰つてからの講義の題目を決め、其の組立も次第に作上げたいと思つてゐる。普通

講義は「日本絵画史概説（上代）」（中世と近世とを次の一学年分は残す計画で、鎌倉の上代系の絵画迄を扱ふつもり）、特殊講義は「日本美術史上の主要問題」、演習は未定だが多分「欧米の支那美術研究」として、之はこちらのコレクション其物の研究では無く、こちらの新旧の代表的文献を批評して自分等の支那研究の道を拓く積り。之れなら最初から田中に支那の講義をして貰へる様になっても、僕として「西域物研究」以外に自分のものとして受持の領域のやうに思ふ。

此間武藤金太君の事を書いたが、此間小西誠一に初めて会ふと、武藤から事づかったといつて日本の御茶を貰った。何だか意志の通ずる所があるやうにもあるね。

小西と一緒に小宮が極近所にある。然し昼には役所風に時間の<sup>(つか)</sup>ままった仕事に疲れるので夜の外出が億劫だから余り会はない。然しいつも会ってゐる様な気持である。夜ボンヤリしてゐると此夏の事を思ふ。

児島はまだ帰って来ないが、モウ今日か明日かと心待にしてゐる。矢代が来てゐる事は此間多少書いたね。矢代は横浜の厳父を失ひ家を焼いて可愛想だ。いゝ境遇に置いて天分を伸ば<sup>(ママ)</sup>せたいものと思ふけれど、僕には矢代はどうしても大切なものゝ欠けた男の様に思はれる。逆境から学ぶ可き事を知らない。環境が人の一生を通じて順なる事が有り得るなら、彼れは得意に才気を発し続け得るであらう。然しあゝした事後の外遊後の彼は日本で僕等の感じてゐた弱点を<sup>(原)</sup>還境と共に押しひろげて発展した傾がある。また我々よりも若いからでもあるか、東洋流の修養が足りなくて、西洋風に短所弱点を構はず取り入れし原気不断もある。僕に児島を中傷するやうな態度に至っては以の外と思つたから、僕は児島の婦人関係問題がもし不名誉な事実として証明せられる時があつても、只夫れ丈けの過ならば、児島の為に堅く弁護して、其の位置の為に戦ふと云つたら、夫れ以来沈黙を守る様になつた。児島は非常識だが、僕はあの問題についての潔白をまだ確信してゐる。

まあ御互に不快な此話はよさう。

原君は今度はベニスも気に入つたらしく、フィレンツェ入りが延び〜で三日中にもなるが、十二月初め迄ゐるやうになるらしいとあるから、僕の南下が遅れても先づ花都以、そして君もみたといふアルビオンホテルで会へる事になるだらう。夫れは楽しみだが此処の仕事がペリオと関係の無い部分でもいゝ切りを付けるのにはまだ先が危かしい。

土井君は<sup>(原)</sup>仏蘭西語の勉強で忙しいらしい。鈴木君とはまだ会はない。

此宿も永くなる程落付けている。朝日の明るい朝は殊に嬉しい。

御健康を祈る。

十二年十一月九日夜巴里 26番室にて

利吉郎

資料13も、資料12の一週間後に送信されており、内容も重なる部分がある。全体として、パリにおける資料調査の進展を報告し、仙台での同僚として充実した研究・教育活動を行うための相談が開陳されている。澤木四方吉門下で武藤金太（1898-1966）の兄弟子にあたる小西誠一（1891-1973）は、この頃に小宮豊隆と一緒にいる事が多く、福井にも接触したことが分かる<sup>47)</sup>。

また美術史家の矢代幸雄（1890-1975）について、福井の批判が見られる<sup>48)</sup>。その中で「児島の婦人問題」にも言及される。この時点で福井は、仮にそれが事実であつたとしても自らは児島を擁護し「潔白を…確信」と言い、児島を「中傷する」矢代と対立している。資料16を見



Hotel d'Albion 2023年8月13日撮影

る限り、福井はこの事もあってか矢代を「友人として失った」らしい。

【資料14】同年12月2日 福井利吉郎書簡<sup>49)</sup>

昨朝巴里から直行してこゝへ来た。丸で夢の様だ。原君夫妻が君にもなじみの此宿にみて、同じ夢を語り合ふので無かったら、此便を君に書く事さへ忘れたであろうと思ふ程に——僅か半日ウフィチを見た位でこれだ。然し可也色々な事を聞かされて来てゐるのだから、初めて日本のものを見た時の様にノボせてゐるとは思はない。君は最後にナショナルギャラリーが、ルーヴルは勿論ウフィチ以上だといふ意見だったと聞いたが、全体としての原物価或は惣額の意味なのだろうね。傑物揃の点に於て僕のウフィチ第一感は恐らく最後迄変らないと思ふ。少くともフィレンツェ第一感（此の大部分は無論類推）。君の帰朝後留守宅への消息を丸尾を通じて東中（京脱カ）の消息を伝えていた。暇が出来たら君の東京だよりを得たい。学校のよりも寧ろ茲に、Hotel d'Albion No31、此のホテルには君のいゝ評判が今は残ってる相で原君の話。

十二月二日 フィレンツェ

福井利吉郎

資料14は、資料13から一ヶ月弱後に書かれている。美術の都フィレンツェに来て、半日ウフィツィ美術館を見ただけで「夢の様だ」など、感動を率直に伝えている。阿部たちとエジプト旅行で一緒だった実業家の原善一郎（1892-1937、三溪の長男）が同宿しており、彼の情報でアルビオンホテル（資料9や13も参照）に阿部の「いい評判」が残っていると記す。

#### 4. 1924年の決別

資料13で福井は、矢代幸雄の児島批判に反論し、彼に会える機会を「今日か明日かと心待にして」いたという。しかし、ようやく得た児島喜久雄との出会いは、福井を失望に陥れたらしい。

【資料15】1924年（大正13）2月20日 福井利吉郎書簡<sup>50)</sup>

十二月五日附君が帰朝後最初の消息は一月十日に羅馬で受取った。それから直ぐに北伊太利を旅して、二月十五日に巴里へ帰った。其後の最初のメールで一月十六日附二度目の細書を得た。初めのは原君と一緒にゐる時で、後のは原君の此地を立つ前日だ。

其原君は昨朝こゝを立つたのだから、此手紙と余り時を隔てずに personal に僕からの消息をも伝へて呉れる事と思ふ。

さて色々面倒な事についての御配慮を感謝する。写真代については十二月末部長からの電報で一応は承知してゐたが、少し要領を得ぬ点があった。君の懇談によって improve したのか、与へられる可き金額も増加してゐる様だ。本当に難有い。

審美書院物は Queritch から度々の決定督促を握って置いた仕合だった。但し之くらで買って貰ふについては僕に撰択の意見があるから、別紙に詳記した通りに御指図を乞ふ。

顧愷之の写真原板を去年七月倫敦から法文学部宛に送ったものについて再三部長には書いたが、到着及び到着後の始末一切報知が無い。今日便で部長に出す手紙にも此事を書きはするが、迷惑ながら君からの報道又は部長への注意を願いたい。

和漢書の蒐集についても心配して貰へて難有い。書目を其内作って送りたいと思ふ。

研究室の事も難有う。

児島の事は別紙に。

「四月以後本式に仙台の人になる」といふのは、移住論の勝利から実行に移ったものと解して嬉しく思ふ。僕は児島の事も考合せて、君の移住を心から希望してゐた。

土居君とは羅馬で君の手紙を貰った後フィレンツェで会ったから、君の Compliment を伝へて置いた。小宮は僕等と懸違ひに南下したので、例の寄合書き<sup>51)</sup>以来会はない。鈴木君には会へるだらう。こゝにゐる筈だ。

伊太利の夢が覚め切らないが、昨日からビブリオテーク通いを初める事にして見ると、矢張自分の天地らしく思ふ。伊太利旅行の本文も挿絵も悉く原君が握ってゐるから、誤訳無しに伝へ呉れる事を頼んで置いた。

旅人の心にみちるものあれば波にゆらるゝゴンドラもよし

こんな歌のやうなものが今にも自分の伊太利の追懐を自分には表現してゐる。然し君にはツマラヌ謳だらう。原君が此歌をどう解して伝へて呉れるか。

僕は五分前からの予定通り三月中こゝにゐる。四月一杯倫敦に、五月から独逸へ移る積りでゐるが、伊太利旅行が半月延びた丈の狂ひはあるかと思ふ。或はこゝの仕事が予想以上手間取って一月遅れ位になりはしないかと恐れてゐる。

フランが下って大分気安い。ローズヴェルトに段々なじみが加はって落付いて来た。パンションにして居る程に。

「移住」に祝福の多幸を祈る。

大正十三年二月廿日夜

利吉郎

阿部学兄 座右

児島の事

此筆を執るのは何よりツライ。僕は今児島を信ずる事が出来なくなっている。君の両度の手紙にも、児島の為め好望な事情が開展しながら、そこに不安の伴ふ事が示されてある通り、現実には夫れ以上に。

詳細は孰れ原君が伝えて呉れるだらう（コンナイヤな問題について伝言を義務づける事はしなかったけれど）。僕の伊太利旅行が余議無い事情で半月延びた事が、僕と児島とをミラノで会<sup>(避)</sup>合せた。児島は今迄、僕に会ふ事を不自然な方法——無精を通り越した——を以て避けてみた。然し、僕はミラノで会ふ迄は、まだ児島を信じてみた。そこで「児島氏及其夫人」としてホテルに登記してある同室暮しの二人を見出した時「予事終る」と思った。其前食事しながら無遠慮に話し合った時も、友人の好意、家庭——一切他を顧みないで目前の自己のみを守る態度の「無精」以上或は「無道徳的」、然し自分には情ない「不道徳」と思はれる態度に失望してはみたが。

僕は今、矢代を友人として失った通りに、児島をも失った。児島に弁明があるなら聞きたいと手紙をホテルに残して置いたが、其後向ふから会ほうともせず、そのまま離れてしまった。僕は今、児島について「記述」するには堪へない。僕の判断が間違っているなら仕合だが、今は君に事実を詳述して判断を乞ふ勇氣も無い。

児島には最早友人として交り続ける事は出来ない事を書いた。男らしく告白する事も弁明する事も出来ぬ男は「日本に帰れば凡て帳消しになる」位に思っているのでは無いかとも思ふ。かねてから、仙台は子供の健康に適せぬから独暮ときめてみると言っていた事も、児島の場合では甚だ面白く無いと思ふ。そんな事で、「帳消し」にならず問題を持越した場合には、現在のまゝの位置でも退いて貰ふ外はあるまい。僕はモウ友人としての最後の好意を尽したのだから、今後は君の好意に——期待できるなら——委ねる外無い。「人間」として生かしたいとは矢代の場合同様、切に念じてあるけれど。

此「児島の事」は、こゝらで。原君と日本で君の外、誰にも漏らさぬものと承知を乞ふ。

大正十三年二月廿三日

利吉郎

資料15では、まず原善一郎の動向を連絡する。彼が福井と知識を共有した後に、パリを発ちそのまま帰国することを前提として、この後で児島の件について報告がある。

続いて福井は、資料収集に関する現状を報せ、阿部の協力を得て順調に進んでいること、今後、特に学部長との交渉等について阿部を頼りにしていることを述べる。その意味で、阿部が一家での仙台移住を決断したことを歓迎している（児島対策を含む）。また、共通の友人である土居光知や小宮豊隆の消息も書き添えている。

イタリア旅行の感動はなお続いていて、ゴンドラを詠んだ短歌を示した後、自身の予定を記して手紙の本文が終わる。それに続き、別紙「児島の事」が、苦渋の中で書かれている。

福井によると、ミラノで児島と出会った際に、その夫人と称する、しかし夫人以外の女性が同宿していたらしい。資料13では、矢代に強く反論し児島を擁護した福井であるにもかかわらず、ミラノで事実を知り、児島の弁明を聞いた後も「信ずる事が出来なくなつた」、人間としては許

すが友人には戻れない、という。ただし詳細は記されず、原に聞くよう促すのみで、事実関係が把握できない。それに関しては、既に末永航が指摘するように<sup>52)</sup>、前年11月24日の小宮の「巴里日記」が注目される。

(前後略) FUはKOJとKさんとの仲について、今迄は楽観説だったが、このごろはすこし悲観説にかたむいているというようなことを云っていた。此夏A・JやFUやHAR君などの間にこれが問題にされたらしい。<sup>53)</sup>

末永は、FUを福井利吉郎、Kを金子まさ子に比定する。さらに情報源やや不明ながら、阿部次郎も参加した前年1月のエジプト旅行の際に「児島はこの「金子氏令嬢」まさ子を親切に世話したらしく、二人の仲が留学している仲間内で噂になったらしいことが小宮豊隆のバリの日記(筆者注：前掲部分)でわかる」と記す。実際A・JやHAR(阿部次郎・原善一郎であろう)の関与は資料15からも裏付けられる。小宮はあくまで児島を信頼し続けるが<sup>54)</sup>、福井は「現在のままの位置も退いて貰う外はあるまい」と、児島が同僚となることにも否定的であった。

それに平仄をあわせるかのように、阿部次郎へは前後して児島の書簡も届いていた。

【資料16】 同年2月7日 児島喜久雄書簡(阿部次郎あて)<sup>55)</sup>

阿部兄 二月七日夜 児島喜久雄

伊太利を巡回する予定を以て四日ミラノに到着。昨六日ブレラ美術館で福井君に偶然出会、色々僕一身上について話があって、君からの手紙の内容の大体を聞いた。夜来訪の筈(しっかりした約束ではなかったが)のところ、僕は用事があって外出中来訪、名刺に断り及び僕の一身上の事については之以上話さないといふ事を記して、幸福な旅行を祈ると書いて置いて行かれた。今朝早く(九時半頃)次の様な手紙を貰った。

「塾考の末更に大きな問題に就て書く。君が友人としての誠意を僕に対して持たぬ限り、僕は今後友人として君に対する事は出来ない。残るものは人としての君に対する好意許りである。其好意を以て之を書く。

大正十三年二月六日

福井利吉郎

児島喜久雄兄」

僕の行蔵にはあきたらないことが多い。度々忠告を受けたのに対して(僕は誠意を欠くと迄考へないけれども、早く事を運ぶことが出来ないのを自分でも悪いとはおもってる。然し何もせずに唯放任して居るのではない)、満足なことをして無いに違いない。然し其事以外に福井君と僕との関係(東北大学における)は、此手紙を受けとっても尚僕が職に在ることを許さない関係だとおもふ。取敢えず辞表を同封したから、非常にすまないとおもふけれども、可然取計らってくれ給へ。僕の此行為は角のある行為のやうに見えるかもしれないけれども、僕の位置としては上記の手紙を受けた今、弁解の余地の与へられて居ない今、之より外に道はないとおもふ。僕は専断だけれども、至急船を取って帰朝する。此上書き度いことがないのでないけれども、今は僕には書いて居れない。僕の為に皆に心配をかけた事は実に相済まない。君や諸先生の信任に報いる道を欠いて居たことを悔んで居る(はっきり書いて置く。僕はかけられた疑を肯定して居るのではない)。御詫は帰ってからする。

尚此事は僕が之迄の福井君の友情を感謝して居ることゝは全く別のことである。僕が今、直に職を去る事の為に幾分でも世間の注意をひいて他の人（殊に金子も）に影響をすることは分って居る。其点は君の考でどうしても便宜の所置<sup>(処方)</sup>をとってくれ給へ。

福井君は、僕にも君の手紙が来て居る筈だとの話だったけれども、僕は本当に巴里を立つ時迄は受取って居ない。

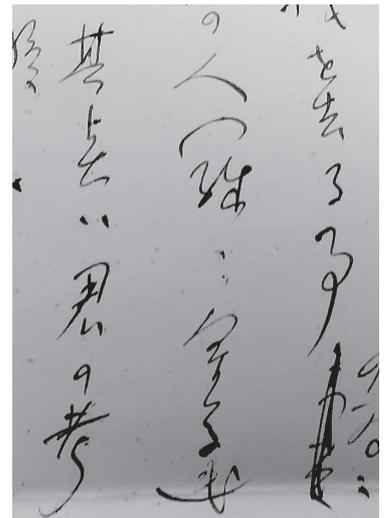
辞職願の適当な紙を持って居ないから、かつて書いて置いた文句もこれでは不適當だったら然る可く訂正してくれ給へ。

独乙で少し発表し度いとおもって居ることがあったので、先日巴里から学長宛延期願を書いたけれども、此場合無論夫は取消す外はないから其事も学長に申上たく置いてくれ玉へ。

(別紙)

<p>辞職願</p> <p style="text-align: right;">小官儀</p> <p>不徳不堪任、茲ニ謹而呈辞表候。何卒御聴許相成度奉願候也。</p> <p style="text-align: center;">大正拾三年二月七日</p> <p style="text-align: right;">東北帝国大学法文学部助教授 児島喜久雄</p> <p>東北帝国大学法文学部長 法学博士 佐藤丑次郎殿</p>
--

児島の記述は、2月6日にミラノで会い絶交に至ったという、福井書簡の内容を裏付ける。児島は、誤解されると主張したいかのようだが（「かけられた疑を肯定して居るのではない」）、自らにそれを招いた落ち度があったことは否定できず、辞表を同封し、説明のため緊急帰国すると記している。「金子」の文字も見える。（右写真）



### おわりに

その後、福井と児島（と阿部）の関係がどうなったのか未詳である。事実だけを言えば、児島が辞職することはなく、彼らは児島が1937年（昭和12）に東京大学に移る頃まで、10年以上にわたり東北帝国大学の法文学部で顔をつきあわせていたと思われる。これ以後も阿部は相変わらず児島と親しく交わっており、だからといって福井との関係が悪化したという情報は管見の限り無い。この件で児島が緊急帰国したことは確認できず、妻（千代、山口県土族・木梨辰次郎の長女）と別れてもいないようである（金子まさ子とのその後については未詳）。また、阿部が何を思い、どのように解決した（できた）のか否かも不明である。なお注意しておきたい。

ところで、阿部のイタリア滞在期の日記が現存しないのは、もともと存在しなかったか、あるいは伝来の過程で偶然失われたのかもしれない。しかし、仮に阿部が何らかの事情で処分したとするなら、家族の書簡からはその理由は見つけられないように思われる。一方、この児島の件は、阿部にとって思い出したくない記憶となったかもしれない。現時点では可能性に過ぎないが、ひとまず仮説として、書き留めておきたい。

## 【付記】

- ・本稿の前半は、日本思想史学会2023年度大会におけるパネル報告にもとづく。会場で種々御教示頂いた諸先生方に御礼申し上げたい。大会開催の記念展では、資料4と8が展示された。
- ・なお本稿は、JSPS科研費18H00617および20K00336の成果の一部である。

## 注

- 1) 例外として、日本女子大学関係者の阿部次郎あて書簡約180通が、小幡明子氏（大平五郎・千枝子夫妻長女）から日本女子大学に寄託され、翻刻が青木生子・原田夏子・岩淵宏子共編『阿部次郎をめぐる手紙』（翰林書房、2010年）として刊行されている。
- 2) 大平千枝子「解説」（『阿部次郎全集』14、角川書店、1962年）p.678。
- 3) 大平千枝子『父阿部次郎』（角川書店、1961年）p.204に阿部次郎逝去後に残された書簡について「…恐らく万を数え、年代も明治30年頃から昭和34年までの約60年に及ぶ…」「整理の第一段階として、これを次の5項目に分けた。①家族親戚、②青春時代、③弟子関係、④学者文化人、⑤出版教育関係。」などの記述がある。今回確認された書簡はその一部と思われるが、他の数千点については所在等不明。
- 4) イタリア滞在中の出来事について、「私の外遊中に与へられた問題」（『阿部次郎全集』17、角川書店、1966年所収）に多少の言及がある。特にフィレンツェ滞在中については「四月のフィレンツェ」（『阿部次郎全集』10、角川書店、1960年所収）が詳しい。
- 5) 『阿部次郎全集』16（角川書店、1963年）p.185、同p.245-246。
- 6) 注2「全集14」、pp.437-493。
- 7) 「仏英日記」の題下には「（前記－北独、和蘭、白耳義）」と記され、北ドイツやオランダ、ベルギー滞在中も存在したようだが、現存は確認できていない。
- 8) 注2「全集14」、pp.181-246、注4「全集17」、pp.533-534。
- 9) 封筒の差出は「日本東京市外中野町千十八／阿部恒」、宛先は「Jiro Abe, Esq.,/c/o Imperial Japanese Embassy, Rome, Itally. /伊太利ローマ日本大使館気附／阿部次郎様」。滞欧中の書簡送付先などの次郎からの指示が、前年12月15日書簡に見える。なお翻刻にあたっては、濁点の有無や拗音「つ」字の大小などについて筆者の推定を含む箇所がある（以下同じ）。
- 10) 1922年（大正11）11月2日書簡。注5「全集16」、p.197。長男の晃が1918年11月に4歳で逝去したことも影響しているだろう。
- 11) 同前、p.187、p.188、p.189、p.192。
- 12) 同前、p.218。
- 13) 同前、pp.209-210。
- 14) 同前、p.197。
- 15) 封筒の宛先は「Signore Ziro Abe,/dall' Ambasciata di Giappone / Roma, Italia. /伊太利羅馬日本大使館気付／阿部次郎様」。
- 16) 1922年12月31日の記事。『阿部六郎全集』第3巻（一穂社、1988年）p.109。
- 17) 六郎の兄次郎に対する感情は、15歳頃から「親しみ心を覚える事が出来なかった」「彼を愛するよりも尊敬する方が多かった」「自己の醜さに対する恥しさにも原因して居た」等、複雑な面が現れたといわれる（注16「六郎全集」3、p.16、同p.581参照）。
- 18) 封筒の宛先は「Signore Ziro Abe. / 'dall Ambasciata di Giappone, / Roma, Italy /伊太利国羅馬府／日本大使館気付／阿部次郎殿」。富太郎書簡の原文はカタカナと平仮名が混在しているが、私に平仮名で統一した。
- 19) 次郎からの書簡はバーゼル（スイス）からの発信とあるので、前年12月30-31日またはこの年1月4-5日に送信か。注5「全集16」、p.216-217。
- 20) 1923年（大正12）3月23日阿部次郎書簡（母宛）。注5「全集16」、p.222。
- 21) 吹田順助（1883-1963）は当時、山形高等学校のドイツ語教官で、一高－東大で阿部次郎の同期。前年9月

- 28日次郎書簡（富太郎宛）に、吹田とハイデルベルクで出会った話を記す（注5「全集16」、p.193）。
- 22) 封筒の差出は「東京牛込原町——四九／竹岡勝也」、宛先は「Mr. Ziro Abe,/at Japanese Embassy,/Paris, France / 仏蘭西巴里日本大使館／阿部次郎様」。
  - 23) 竹岡に関しては、山口輝臣「大正時代の『新しい歴史学』」（『季刊日本思想史』67、2005年）が研究史上の位置を論じ、同「竹岡勝也の肖像（上/中/下）」（『史淵』143-145、2006-08年）が事績などについて詳しく記述する。
  - 24) 3月2日次郎書簡（妻宛）や、5月20日同（六郎宛）に神保の名が見える。注5「全集16」、p.219およびp.228。
  - 25) 注23「竹岡勝也の肖像（下）」では法政大学予科教授就任の説明に、和辻の関与は触れられていない。
  - 26) 同時期にパリに滞在していた洋画家の小島善太郎（1892-1984）か。1923年の阿部次郎あて書簡（東北大学文学部所蔵、史料館に寄託）に、行違って結局マルセイユでも会えなかったことや、小島が竹岡勝也と連絡を交わしたことが記されている。
  - 27) 封筒の差出は「T. Abe, No.18 Nakanmachi / Tokyo, Japan」、宛先は「Mr. Z. Abe, / c/o Imperial Japanese Embassy, / London, / England.」「英国ロンドン日本大使館気附／阿部次郎様」。
  - 28) 次郎が落着したのは8月13日にロンドンに移動した際のような。宛先をパリにしなかったため（注9の送信先指示による）行き違いとなり、手紙を待ちわびた次郎から恒に、7月26日に怒りの手紙が送られている。注5「全集16」、p.237、同p.240。
  - 29) 注5「全集16」、p.216。
  - 30) 阿部次郎・恒夫妻の独特な関係性については、竹内洋『教養知識人の運命』（筑摩書房、2018年）pp.153-160など参照。
  - 31) 川上涇編「福井利吉郎先生概歴と著作目録」（『文化』20-2、1956年）pp.324-326。
  - 32) 末永航『イタリア、旅する心』（青弓社、2005年）、特に第4章を参照。
  - 33) レスタースクエア（ロンドン）の絵葉書。差出は「R.Fukui/16 Helix Rd./Brixton Hill/London S.W.2」、宛先は「Herr Jiro Abe,/ bei Herr Schwarz /Germany/Heidelberg /Wolfolernnenne12 /阿部次郎様」。
  - 34) 後のことではあるが、阿部は和辻哲郎宛1923年（大正12）6月8日書簡で、日本人著者の日本文化論で翻訳出版するに値する著書として、和辻の『古寺巡礼』『日本古代文化』に加え、福井の日本美術史の業績を挙げる。また小宮豊隆宛同年8月20日書簡で、福井の『英京日記』に対する小宮の批判を宥め「福井の無邪気で可愛いところ」の現われと弁護している。注5「全集16」、p.229、同p.242。
  - 35) 封筒の差出は「R.Fukui/16 Helix Rd./Brixton Hill/London S.W.2」、宛先は「Herrn Z. Abe,/bei Henn Schwarz, /Wolfsbrunnenwrg12,/Heidelberg,/Germany」。
  - 36) 児島喜久雄『美術の小窓』（雪華社、1965年）に「著者略年譜及び著作」を掲載する。
  - 37) 『東北大学五十年史』下巻（東北大学、1960年）p.1731参照。
  - 38) 封筒の差出は「R,Fukui/16 Helix Rd./Brixton Hill/London S.W.2」、宛先は「Signore Ziro Abe,/Ambasciata Giapponese, /Roma, /Italy. / 文部省在外研究員／阿部次郎様」。
  - 39) 阿部六郎は竹内の死に衝撃をうけ「驚愕のみが私を捉へはしなかった。懐かしさだった、親しさだった。自分の空想を勇敢に実現した他人が、他人ならぬ竹内仁だった。阿部次郎の人格主義を非難し手こづらせた俊才の青年哲人の彼だった。なぜともない、彼は私の魂に結ばれてゐた人のやうな気がする」と記した（注16「六郎全集」3、p.108）。たとえば六郎など家族や、他の知人から情報提供の可能性もあるが、現時点では未確認。阿部と竹内の論争については、田中祐介「『文芸批評の標準』の変動を導いたもの」（曾根原理・伴野文亮・仁平政人編『阿部次郎ルネサンス』ペリカン社、2024年）など参照。
  - 40) 封筒の差出は「R,Fukui/16 Helix Rd./Brixton Hill/London S.W.2」、宛先は「Signore Ziro Abe, /Hotel Albion /Filenze/Italie / 文部省在外研究員／阿部次郎様」。
  - 41) 大英博物館 Mousoleum Room の絵葉書使用。宛先は「Signore Z.Abe,/Ambasciata Giapponese,/Paris/France / 文部省在外研究員／阿部次郎様」。
  - 42) この模写事業については前田青邨「女史箴図巻の模写」（『芸術新潮』5-12、1954年）、出来上がった「臨顧愷之女史箴図巻」については、同編集委員会編『ものがたり東北大学の至宝』（東北大学出版会、2009年）pp.39-40など参照。
  - 43) 宛先「Monsieur Z.Abe,Sendai,Japon./Via Amerique / 仙台市東北帝国大学法文学部／阿部次郎様」、差出

- 「Exp.R.Fukui,chez l' Ambassade du Japon, Paris.」。
- 44) 封筒の宛先は「Monsieur Z.Abe,Sendai,Japon./Via Amerique /仙台市東北帝国大学法文学部/阿部次郎様」、差出「Exp.R.Fukui,chez l' Ambassade du Japon,Paris.」。
- 45) 福井利吉郎は1923年（大正12）に2,400円の研究費補助を受けている。また佐藤丑次郎の申請により、東北帝国大学は1924年（大正13）に13,200円の支援をうけスタイン文庫を購入している。同編集委員会編『財団法人斎藤報恩会のあゆみ』（2009年）p.30、118、130。
- 46) 封筒の宛先は「Monsieur Z.Abe,Sendai,Japon./Via Amerique /仙台市東北帝国大学法文学部/阿部次郎様」、差出「Exp.R.Fukui,chez l' Ambassade du Japon,Paris.」。
- 47) 注32末永著書、pp.208-209参照。
- 48) 小宮豊隆の「巴里日記」には、福井が矢代の「悪口」を話し、児島も矢代との同席を避けるなど「よっぽど嫌い」に見えたという（小宮自身はそれには与しない）。以上、『心』18-5（1965年5月）pp.72-73、同18-6（同年6月）p.227。一方、矢代幸雄「児島喜久雄の思い出」（同『忘れ得ぬ人々』岩波書店、1984年）を見る限り、矢代は児島没後も、彼を親友として扱っていたようである。
- 49) ボッティチェリ『マニフィカトの聖母』の絵葉書使用。絵の説明が「Incoronazione della Vergine」（聖母戴冠）と印刷されているのは不審。宛先は「Signora Z. Abe./Yokohama,Giapon./via America /仙台市東北帝国大学法文学部阿部次郎様」。
- 50) 封筒の宛先は「Monsieur Z.Abe,Tokyo,Japon./Via Amerique /東京市外中野、一〇一八、阿部次郎様」、差出「Exp.R.Fukui,chez l' Ambassade du Japon,Paris.」。
- 51) 11月25日付小宮豊隆・福井利吉郎・鈴木京也・土居光知連名書簡（東北大学文学部所蔵、史料館へ寄託）。
- 52) 注32末永著書、p.196。
- 53) 注48『心』18-6、p.227。
- 54) 「巴里日記」では「KOJはKOJのすきな通りにすればいいじゃないか」（11月24日条）、「Kさんと関係のあるなしを問題にするのは、あまりに俗っぽいやきもちで、反省のない人の、もしくは自分の好色癖に反省を加えるところのない人がする人だと思う」（同月27日条）などと記す。注48『心』18-6、p.227、『心』18-7（1965年7月）p.81。
- 55) 封筒の差出は「Kikuo Kojima/chez l' ambassade du Japon/Paris/Via Amerique」、宛先は「Monsieur le Prof. Ziro Abe/Sendai/Japon /仙台市東北帝国大学文学部教授 阿部次郎兄」。
- 56) 小宮豊隆『イタリー日記』（角川書店、1979年）p.228には、3月10日に小宮がフィレンツェで会った際に、児島は「今日ローマに行くのだそうだ」「少し話をして別れる」とあり、帰国の様子は見えない。児島から阿部への書簡で、次の1通も発見されている（東北大学文学部所蔵、史料館へ寄託）。年月日未詳だが、1924年12月8日の消印を持つ。いつ頃まで児島がこの件での帰国を考えていたか、考える材料になるかもしれない。「君に手紙を書かうとして幾度も考へただけけれども、事情は非常にDelicateな事柄なので、手紙に書く事は出来ないとおもった。帰朝後詳細君に御話するから諒として戴き度い。帰路については追而又電報を出す／喜久雄／阿部兄」